

書評

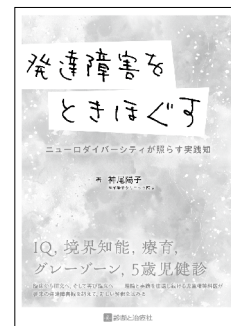
『発達障害をときほぐす ニューロダイバーシティが照らす実践知』

診療現場では、平均的な行動から外れたヒトを「発達障害」として分け、各障害名を細分類してきた。その結果、「発達障害」のヒトは正常から逸脱した異常として扱われ、人間としての同一性がみえなくなっている。正常か否かと分けるのではなく人間の多様性とみることで、新しい社会や人間関係を創造していくことが重要である。多様性は本来、インクルーシブと対となる概念である。社会への不適応要因は個人ごとに多様であり、必要なアセスメントを実施し、発達支援方策を個別に考案し社会参加を可能とすることが求められている。そのための思考プロセスを熟達者である著者が実践的に開示している本書は、他に類を見ない。

第1、2章ではIQや境界知能の再考が述べられている。IQ検査の結果を偏重することなく、実際の診療場面では支援の方向性を探る手段のひとつとして活用し、検査結果から各自の「発達可能性」を読み取る方策が提示されている。また、診断名ではない「境界知能」なる用語は、実際の診療場面では有用であり、新たな定義が紹介されている点も有益である。

療育や親支援も早急な見直しが求められている。発達障害児だけではなく家族の視点からの療育目標が、第3～5章でわかりやすく概説されている。発達障害診療では、親の発達特性にも多く問題がみられることがあり、「親子治療」の具体例は読者にとって大変参考となる。

第6～8章では、グレーゾーン、5歳児健診、2eギフトッドなど最近話題のテーマを取り上げている。診断域下やカモフラージュにより必要な支援が受けられていない人が多くいることが推測される。ギフトッドと発達障害を併せもつ2eが正しく診断されていない可能性も指摘されている。



- 発行：診断と治療社
- 定価：本体 3,200 円 + 税
- 著：神尾陽子
- 仕様：A5、140 ページ

本書は発達障害を「尊重されるべき神経多様性のひとつ」との観点から、医療、教育、福祉現場での再考を促している。単なる既存制度での手続き論で済ますのではなく、真の共生社会を見通す「実践知」を与えてくれる良書である。

(千葉大学子どものこころの発達教育研究センター客員教授、第2北総病院神経発達研究センター長 杉田克生)